六　九州巡り

長崎街道

平成十四年四月二十二日、夜行バスで八時に下関に着く。関門トンネル内ではウォーキングの人達が多い。以前は見られなかった光景だ。九州側へ出ると「門司関址」の碑が建つ。大化二（六四六）年、門司と太宰府を結ぶ九州第一の駅がここに設置された。小倉から国道の長崎街道に入り、黒埼の小高い丘の公園で人目につかぬテント場を見つけた。

今日からしばらく長崎街道を南西に進む。鎖国時代の長崎は、唯一の開港地として西欧文明の窓口だった。慶長十七（一六一二）年、街道は冷水峠が開かれたことにより、小倉から長崎まで五十七里（二二八キロ）二五宿が成立した。公人、商人、文人など多くの人達が、小倉から佐賀をへて長崎へ至る街道を往来した。

直方市で遠賀川を渡り小竹町に向かう。「飯野〇〇店」の看板がよく目につく。何故か他人とは思えない。小竹町役場側の観音堂には、前だれをかけた五十体ほどの石仏が境内をとりまく。巨木にからまる大藤は、今を満開に紫の房を樹木いっぱいに垂らしていた。小竹の街中には木屋瀬宿と飯塚宿を結ぶ、道幅三メートル半ほどの狭い旧道が残る。天候はかんばしくなく、飯塚市街地を出はずれた橋下に宿を求めた。

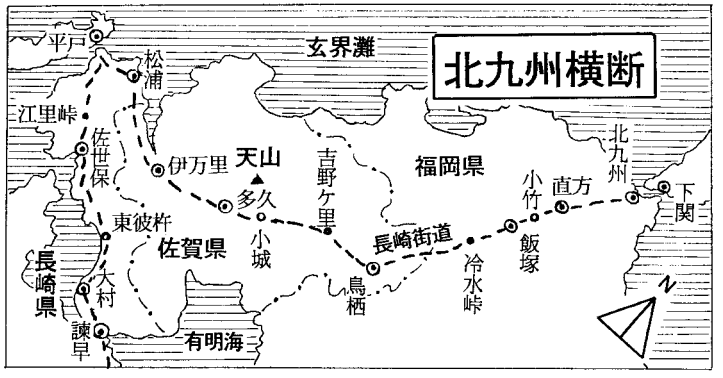
冷水峠の石畳（首無し地蔵前）

冷水峠

穂波町天道（てんとう）の古い蔵造りの町並みを行く。筑穂（ちくほ）町へ入ると「長尾の一里塚」があった。すでに付近の田には青々とした早苗が植えられていた。内野宿は四メートルほどの道幅の街道に、宿場の面影をとどめている。薩摩屋（中茶屋）、長崎屋（下茶屋）などの脇本陣跡が残る。

宿場のはずれ、老松神社から冷水峠へ向かう。旧道の入口には大根地神社の鳥居が立つ。最後の民家で峠への道筋を聞いた。あまり詳しく教えてもらい、かえってわからなくなった。苔むす石畳の旧道を進むと分岐。左の旧道に入るとこぶのある古木の傍らに、「首なし地蔵」が祀られていた。盗賊に襲われた旅人を、身代わりに首を落とされて地蔵が救ったという。

清流で喉を潤してから、再び石畳を踏みしめて峠をめざす。五百メートルほどであっけなく峠の頂きに着いた。昔は「九州の箱根」と言われ、天険冷水峠の二里二十丁は長崎街道随一の難所であった。峠には大根地神社の鳥居のほか、「従是西御笠郡」「従是東穂波郡」の郡標が建てられている。峠の下りは「九州自然歩道」になっていた。冷水峠越えは歴史の道百選になっているが、



道標など何もないのがかえって魅力だ。

再び国道二百号に合うと、山家（やまえ）宿まで長い下りが待っていた。国道三号沿いには国境石があった。文化四（一八〇七）年、境界の松が枯れたので「従是東筑前国」「従是西肥前国対州領」の境界石が建てられた。

吉野ケ里

鳥栖（とす）市、中原（なかばる）町と過ぎ、東背振村の「吉野ケ里」遺跡へ向かう。登校の小学生の行列に会う。次々に挨拶をされ山道で出会ったようだ。どこの地域でも中学生になるとまれになり、高校生では他人に挨拶はしなくなる。

麦畑の穂波が続き、右手に復元された遺跡の建物が見えてきた。遺跡は田手川の右岸の段丘上にあり、一帯が広い歴史公園になっている。国内最大級の環壕集落跡で、平成元年に遺跡の全貌が明らかになった。六百年間続いた弥生時代すべての時期の遺跡、遺物が発見されている。時代の社会変化が、一ケ所の遺跡で分かるという学術的価値が高い。メモを

とりながら巡回する小学生と一緒に遺跡を見学した。

吉野ケ里をあとに、神埼町の市街地へ入る。庁舎には物見台が復元されていた。「相撲茶屋佐賀の里」の看板を見つける。佐賀の里は後の幕内力士宮柱である。引退後は浜風親方になり、現在は福岡市内に住んでいるらしい。まだ開店前だったので、当人の経営かどうかは確認できなかった。昭和三十二年夏場所千秋楽。ファンだった高校生のころ当時の十両佐賀の里関に、満員札止めの国技館へ無料で入れてもらったことがある。

神埼宿から長崎街道と分かれ小城町へ向かう。途中の嘉瀬川にかかる名護屋橋は、秀吉が名護屋城への途次、氾濫で渡れなかった時、鍋島直茂が舟橋をつくって一行を渡したことに因む。

右前方に、どっしりとした天山が見えてきた。小城町へ入るとさらに風格ある姿で迫る。かつての天山登山が思い出される。小城は羊羹が名高く、増田本店の藁葺き屋根に歴史を感じる。今夜は適当なテント場がなく、国道と鉄道に挟まれた杉林の中。少しうるさいが我慢しよう。

伊万里市

今朝は冷え込み息が白い。山間では霜注意報が出ていた。雲もなく、朝日に天山の頂が明るい緑に輝く。西多久で国指定くど造り民家を見てから、八幡岳南裾の女山峠へ向かう。「おはようございます、お気をつけて」。干し物中の娘さんの笑顔に励まされ元気百倍。自然と足早になりすぐに峠へ着いた。

川古へ下ると全国巨木第三位の大楠があった。幹周二十一メートル、根廻三十三メートル、樹高二十五メートル。幹の太さに圧倒。巨木の周囲は小川の流れる小公園で、毎年四月二十九日には大楠スケッチ大会が開かれている。因みに巨木の一位は鹿児島県蒲生の楠、二位が静岡県阿豆佐和気神社の楠である。

陶器で有名な伊万里市に着く。生地が白く透明な有田焼は、酒井田柿右衛門が着色に成功して発展した。藩では製法の秘密を守るため、十二キロ離れた伊万里で取引きさせた。そのため「伊万里焼」の名で知られるようになった。

駅前の街路にある陶磁器の人形を撫ぜてから、平戸口に通じる国道をとる。郊外の青幡神社の楠は、根廻二十八メートル、樹齢八百年。根元は八畳ほどの広い空洞になっていた。二つの巨木にあえて満足の一日であった。

久原駅前の案内板には中国、朝鮮の文字も書かれ、大陸が近いことを知る。今福港で朝食をとりながら海をながめていると、底引き網で捕った魚を積んだ漁船が入港。料亭などの人達がクロダイ、フグ、タコ、アナゴなど生きたまま買っていった。

平戸への道

松浦市街地が近づくと、松浦党の大兜が海に向いて置かれていた。松浦氏は今福に梶谷城を築き、源平舟合戦や元寇などで活躍。交易による大陸文化を取り入れて繁栄した。アジの水揚げ日

本一という魚市場を過ぎる。市街地をぬけると、海に張り出すように、東洋一の巨大な火力発電所があった。

早朝、「日本最西端の駅」の標識が立つ平戸口駅前に着く。日本一周は北海道の宗谷岬と納沙布岬、九州の平戸島と佐多岬を回らねば一周したことにならぬともいう。いずれも本土の東西南北の端である。

かつて船で渡った平戸島も今は大吊橋で渡れる。案内板を見ていたらふいに後ろから「平戸へ観光にいらっしゃったの」。婦人に声をかけられた。すぐ先の休憩場の土産屋の人だった。案内図をいただき平戸市内見物にでかける。平戸島は二度目だが、三十五年の歳月はどれも新鮮に写してくれる。

石垣で囲まれた石段で平戸城にのぼる。復元された城内には、松浦氏関係の膨大な資料が展示されていた。天守閣から展望を楽しみ、オランダ商館跡へ行ってみる。幕府とオランダとの間で交易が開始された所である。今はわずかに石垣や赤レンガが残るのみ。オランダ坂を上がり、ザビエル教会をまわって島をあとにした。

オランダ商館跡

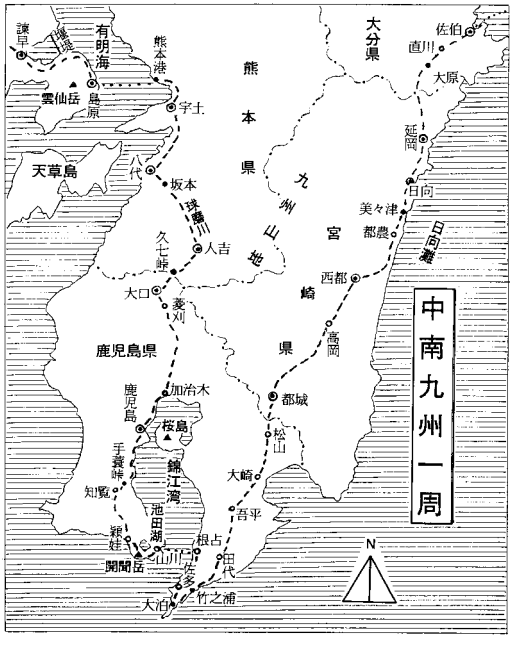
平戸から、「オランダ街道」と命名された国道をとる。江迎町からは古い平戸街道を行く。江里峠を越えて佐々町へ下る途中には、一里塚跡や茶室跡などがあった。相浦橋のたもとでのどかな風景を見ながら休息。川をまたいでたくさんの鯉のぼりが泳ぐ。川の中では白サギが魚をついばみ、岸辺ではアヒルと幼児が遊ぶ。

小さな日野峠を越えると佐世保港が見えた。市街地は大きく、背後の斜面にも住宅が建て込んでいる。市内をぬけた早岐には、平戸街道の石畳の一部が残っていた。西洋のお伽の城のような、ハウステンボスの豪華な建物を右にして行く。オランダ語で「森の家」を意味する。東京ディズニーランドの二倍の敷地面積があり、六十パーセントが緑地。オランダの宮殿と街並みを再現した、「環境未来都市」のモデルで大型リゾート施設だ。

島原半島

早朝の静かな大村湾を右手にしながら、平戸街道と長崎街道との分岐点の東彼杵町へ着く。九州郵便の置かれた宿場町だった。再び、長崎街道の旧道を拾いながら大村に向かう。市街地へ入ると左に市の総鎮守の昊天宮、境内は社叢の巨木が茂る神域だった。

大村氏菩提寺の本経寺に寄る。本堂前の大ソテツも見事だが、墓地の「大村家墓碑群」には目を見張った。領主たちの巨大な墓碑のうち、最大は七メートルにも及ぶ。本陣通りは商店の並ぶアーケードで、歩行者用の縁台が置かれていた。今夜は雨の予報、諫早の市街地をぬけた橋の下



で一夜を明かした。

朝から雨。愛野町の柳の植えられた水路沿いを歩く。雨にぬれた柳は風情がある。島原半島に入ったが、ガスで雲仙岳は姿を隠していた。問題の諫早湾の堤防を見に行く。最近水門が開かれたばかりで、締切りによる湾の生態系への影響などを調査中とか。石積みの長い堰堤が対岸へ伸びている。海水は濁っており、無数の貝殻が打ち上げられていた。長浜海水浴場は火山岩の小さな玉石が海岸にびっしり、有明町の浜沿いには静かな旧道が残っていた。

堤防の側にテント場を定め、アサリ採りをながめて過ごす。ウォーキング中の三人連れの婦人に、旅行中の話をしてからテントに入った。翌朝、雲仙岳の全貌が見えていた。さっそく散歩にきた老人に話を聞く。「噴火のときゃ、この辺りまで大量の灰が降ってきてねえ。麓じゃそりゃあ怖かったよ」。山頂に岩峰のある普賢岳のドームからは、まだ白い煙りが立ちのぼっていた。

島原市街に近づくと、だんだん普賢岳の火砕流の跡がよく見えてきた。えぐられた爪痕のすぐそばまで民家が密集しているのがわかる。熊本港行のフェリー乗り場は、島原城の建つ市街地のはずれにあった。

球磨川舟下り

人吉街道

島原湾を横断し熊本港に上陸後、大橋を渡り国道を宇土市へ向かう。途中から雨になり松橋町の橋下に宿を求めた。白い糞がいっぱい。橋の天井を見上げると、先住のハトたちの寝ぐらだった。

八代市街地へ入る。八代亜紀ファンとしては一度は訪れたい街だった。新萩原橋で球磨川の河口を渡る。ここから球磨川に沿う「人吉街道」を行く。坂本で早くも急流が現れた。鶴の湯温泉は三階建ての大旅館が一軒、切り立つ断崖下にあった。今は営業していないようだ。夕立が来たので今日も橋下へ避難した。

瀬戸石ダムから国道対岸の旧道を歩く。イモリが